

2018年1月

『画像診断』増刊号として、「頭部の鑑別診断のポイント」をお届けします。肝胆膵，婦人科に次ぐ鑑別診断のポイントシリーズとなります。頭部の画像診断は疾患の数およびバラエティーが多いため，専門家にとってはとても勉強しがいのある，非専門家にとっては鑑別に難渋するところが多い，分野かと思います。依頼科が腫瘍と思いついているような病変の鑑別を，先入観念に囚われずに，全く違う観点からアプローチして，例えば寄生虫の肉芽腫など全く異なる疾患を挙げ，それが正しい診断であったときは喜びに打ち震えることができます。最近よく使われるようになったserendipityです。良悪性診断を非常に正確に毎回行うのも重要と思いますが，気が重いところも多いかと思います。その点，鮮やかな場外ホームランは気持ちが良いと思います。ただ，そのためには沢山の鑑別が必要に応じて出てこないといけませんし，(こっそり)カンファレンス前に種々の臨床情報を下調べをするような地道な努力が重要です。

以前，『所見からせまる脳MRI』という鑑別診断の本を，大場先生，下野先生，土屋先生と出しましたが，この増刊号はその弟分に当たる位置づけです。もちろん新しい鑑別が加わっているのが専門家にも役立つとは思いますが，主に鑑別診断の基本をこれから学ぶ研修医，脳画像を扱う放射線科以外の科の先生方，脳が専門ではない放射線科医に役立つものと考えます。

順天堂大学大学院医学研究科 放射線医学
青木 茂樹

この本は『画像診断』増刊号，「頭部の鑑別診断のポイント」ですが，出版から10年近く経った『所見からせまる脳MRI』という鑑別診断の本のある意味最新版でもあります。画像診断において鑑別診断を過不足なく列記するのは重要なことで，古くは『Gamuts in Radiology』，その後，『Radiology review manual』など読影室に欠かせない教科書があり，これらは今でも非常に役立つ名著であることには変わりありません。しかしながら所見を文字だけで表したものと，実際の画像を載せたものとは情報量に雲泥の差があります。放射線科医も，あるいは画像診断の領域全体が圧倒的な画像情報の中で鍛え上げられてきて，単なる文字の所見では全く物足りなくなっているのかと思います。新しい疾患概念も増え，疾患に特徴的な画像所見などの報告も日々増加し続けています。

しかし，何といても人間は目から入る情報が圧倒的に多いので，有用な画像をたくさん見ることによって画像鑑別能力といったものが自然に鍛えられ，脳が勝手に絵合わせをして診断してくれると思います。この教科書は企画された青木先生の意図通り，脳神経領域の画像鑑別能力を磨く絶好の教科書となっています。将来AIが画像診断する時代になると人間の見た目よりも，信号の分布などから診断されるようになるのかもしれませんが，希望的にあと何十年かは見た目重視，絵心を持って診断したいものです。

帝京大学医学部 放射線科学講座
大場 洋